魔姫のツバサ

ホーネット

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔姫のツバサ

【Ｎコード】
Ｎ８２８９Ｗ

【作者名】
ホーネット

【あらすじ】
”科学革命”から早くも数十年。既に時代は騎士から火器へ、魔法から科学へと動きつつあった。
異国の風貌を持つ美青年ツバサ。粛々と軍の任務をこなす日々の中、赤い髪の少女と出会う。
そして、その出会いは世界の覇権を動かす大事に発展していくこととなる……

近代に突入した欧州をモデルにした、ファンタジー小説です。

序章　運命の夜（前書き）

初めまして、七綿といいます。以前、こちらで投稿していた作品ですが、改良して再び載せることにしました。週1ペースでの連載にしようかと思っています。

話の内容は、近代ファンタジー小説？　的なものになっています。

序章　運命の夜

序章　運命の夜

少女との距離はメートルにして一桁程度だ。プロとして当然のことだが、少女はツバサに気付く様子などない。規則正しく胸を上下させているだけだった。少女の長く、艶やかな赤髪が月の明かりを受けて爛々と輝いて見える。そっと顔を改めて確認してみると、その赤髪と白い珠のような肌、翠の瞳、そして人形的にまで整った顔立ちで、一つの完成された美貌の持ち主であると誰もが認めるだろうと断言できた。

少女の服装は最近、神聖帝国貴族の女子の間で流行しているゴシック調の黒服で、それはやもすれば天使のような容姿の少女に若干悪魔的な雰囲気を与えている。

ツバサはベッドで寝そべる少女を見下ろすように眺めながら、今までの任務とは違い、幼い命を刈ろうとしていることに若干の罪悪感を覚えた。だが、今が絶好の機会であるとの合理的な思考が、軍人であるツバサに残酷な暗殺者へとなる事への後押しをした。

今回、ツバサは銃を使わない。銃声がすれば、いくら堕落しているとはいえ、警備兵が飛んでくる。ツバサの実力からすれば警備兵など一蹴できるだろうが、面倒事は避けるに越したことはなかった。

ツバサは胸元からナイフを取り出し右手に構えた。そして――無慈悲にも少女の命を絶とうとナイフを勢いよく振りおろした。

気配に気が付いたのか、少女が黄金の眼を開いた。だが、遅かっ

た。ツバサの振るったナイフは物理的法則の通り、少女の首を切り裂こうとした。

「なっ」

だが、そこで予想外のことが起きてしまい、ツバサは思わず声を出してしまった。少女の首は切り裂かれるべきだった。それだというのに、その少女の姿が視界から消えてしまったのだ。いつもなら、ここで冷静な判断をし、迎撃の構えをとったに違いないのに、このときのツバサは大きく動揺していた。今まで戦闘の最中に油断したことなど無いツバサだったが、今回の任務ではそもそも初手がかわされ、戦闘になるとさえ思ってもみなかったのだ。それゆえに何も構えもせずに、ただ、少女の姿を探してツバサは後ろに振り向いた。当然のように、振り返ると、そこには艶やかな笑みを浮かべる少女が立っていた。

それを見て、ツバサは少女がどういう存在かに気が付いた。そう、物理的法則に従わない——科学とは対極を成す力、魔術を使う存在だと。しかし、思考は辛うじて反応できたが、ツバサの身体の方はそうはいかなかった。驚きの硬直から抜け出せずに、少女に無防備な姿を晒してしまう。

その瞬間、少女はツバサの方へと飛びつき、首に手を回し、そして黄金の瞳を瞑って薄い唇を、ツバサの唇に触れさせた。

少女の体からはすごく甘く、いい匂いがした。少女の体は恐ろしく軽く、柔らかだった。最初は異常事態に驚いていたツバサだったが、だんだんとこうすること当たり前のことで、ナイフを投げ捨てて、少女を抱きしめ返すことが、最も大事な事のように思えてきた。

力の抜けたツバサの手からナイフが滑り落ちた。ツバサは少女を抱きしめ返し、さらに強く抱きしめ、キスをしようとした。そこで、少女の瞳が薄く開かれた。紅い瞳が。深く、深い、紅い瞳が。その瞳には艶やかな、娼婦のような毒々しさと残虐な優越感に浸った輝きが湛えられていた。

一瞬の出来事だった。その紅の瞳が放つ異様な感覚にツバサの生存本能が、身体を突き動かした。

「きゃっ」

少女は驚いたように声を上げ、尻餅をついた。なぜならば、少女が今までキスをしていた相手に突然突き飛ばされたからだ。驚きの表情は次の瞬間にはさらにその度合いを強め、次に表情を強ばらせた。なぜなら、ツバサの右手には、拳銃が握られ、その銃口の射線には、少女の頭部があったからだ。

ツバサは朦朧とした意識の中で、それでも力強く、生存本能が命じるままに、引き金を引いた。銃声が部屋に響き、着弾と同時に少女の小さな身体は後ろに倒れた。

少女が倒れて直に、ツバサの意識ははっきりと戻った。だが、それでも先ほどの不思議な少女との接吻のためか、冷静さを欠いたままだった。いつものツバサなら、家中で拳銃を使ってしまった段階で、さっさとこの場から去っていただろう。

だが、今回、彼はそうしなかった。特に考えもなしに、ただ、なんとなく少女の遺体に近づいて、その死を確認しようとした。後一歩というところまで近づいたところで、

「キスした相手に銃弾をぶっ放すなんてひどいんじゃないかしら」

少女の遺体がしゃべった。ゆらり、と少女が立ち上がる。少女の頭部からは赤い鮮血が零れ落ち、銃弾が間違いなく彼女の頭部に命中した事を証明している。だが、少女は平然と、流れてくる自らの血を指ですくい、嘗めとった。表情は別段、頭部の傷を気にしている風もなく、扇情的な笑みである。ツバサはとっさに地を蹴り、少女との距離をとった。

「やっぱり、おまえ、こっち側かよ」

ならばこっち側の流儀で戦うだけだ、とツバサは自らの相棒を呼び出す。

「来い！　エンオウ」

その叫びと共に、ツバサの手に光が収束し、そこには炎に包まれた鋭利な刃物が現れる。それと同時に、ツバサの周囲に炎が広がった。これは、エンオウという神器の力を借りているから出来る芸当だった。本来、魔術には詠唱というものが必要であるが、熟練した術者なら、それを短縮することもできる。だが、何も唱えないというのに、魔術的な力を働かせるという芸当は、神器などがなければ不可能であった。

「燃やすものと燃やさないものとを細かに分けてるわね。これほど精密な魔力制御……エンオウ、というのは大和の言葉で炎の王という意味かしら？」

部屋が一瞬で炎で満たされるというこの光景を見ても、少女は臆することもなく、床や壁が燃えていないのを見て、冷静な分析を行った。

「極東の島国の言葉をよく知っているな」

確かに、エンオウとは炎王、もしくは炎皇と和語では書く。そのことを知っている少女の博識にツバサは軽く驚いた。

「何せ何百年も生きているから、いろんなものを見、いろんな話を聞き、いろんな人に会ったわ。その中になかなか面白い黒髪黒眼の女がいたわ」

「何百年……やっぱり魔族か」

しかし、いくら科学の時代に変容しつつあるとはいえ、ツバサはイブレーア教の楯である神聖帝国が魔族を飼っているとは思っていなかった。そして、なぜ、自分にターゲットである少女が魔族と知らされていなかったのか疑問に思った。最初から少女が魔族であることを知っていれば、もっとやりようがあったはずだったのだ。

（嵌められたかな）

異国の髪と名前を持つ自分に、一つ上の上官や同僚たちが良い感情を持っていないことを、ツバサは知っていた。帰ったら、嵌めた奴らを殴ろう、と固く決意をしつつ、脳裏には既に何人かの顔をリストアップしていた。そして、その決意を実行するために、全力で生きて帰ってみせると誓ったのだった。

「あなたもこっち側だったのね。不意を突いた魅惑の呪いを破ると

はやるわね」

そんな少女のどうでもよい話を無視して、ツバサは生きて帰るために全力でエンオウを手に少女に挑む。

「仕方ないわね……」

少女の方も剣を取った。それは細身の、レイピアと呼ばれる種類のものだった。肉薄するツバサに臆する風も無く、ただ、剣を構えた。その顔には遊びか余裕かわからないが、笑みが浮かんでいた。

数合、激しく打ち合う。少女が必殺の構えを見せる。

レイピアは、受けには向かない。それゆえ、ツバサは少女の次の行動を回避と反撃の突きだと予測した。ツバサの予測通り、少女は紙一重で斬撃をかわし、流れるように鋭い突きを放った。予測していた。ツバサをその一撃を避ける。両者とも、大振りな一撃に失敗し、一瞬、互いに無防備になった。

「燃やせ！」

反攻の一撃に失敗した少女へ、数瞬ほど前に彼女がかわしたエンオウの刃から炎が襲い掛かる。

「ぐっ」

少女は無防備なところに襲い掛かってきた炎をまともに被った。黄金瞳が、ここまで絶えず笑みを浮かべていた顔が、苦痛に歪んだ。少女の身に纏っている魔力が彼女の肉を焦がすことを防いだとはいえ、その白磁のような肌の下は数百度の熱を浴び、かなりのダメー

ジを受けたはずだ。この機を逃すまいと、ツバサは刀を横に薙ぎ、手負いの少女へ切りつける。さすがに、これは予想内だったのか、炎に怯みながらも、少女はその一撃を見切り、レイピアのもっとも頑丈な部分である鍔でそれを受けた。

「貰った！」

少女が斬撃を受けると同時にツバサが蹴りを放った。飢えた猛禽類が一直線に獲物に襲い掛かったような真っ直ぐで、鋭い一撃。

「がはっ……」

それは少女の腹部にのめり込み、内臓を確実に捕らえた。物理的法則に従って、少女の小さな身体が跳ね上がった。ツバサは犬や猫を蹴飛ばしたような、あまりに軽い感触に、少女が余りにも小さいことを思い出した。そして、うずくまる少女に再び罪悪感が頭をもたげて始めた。

「なぁ、俺さ、別にもう、あんたのクビはどうでもよくなったんだ。だから、もし、帰してくれるんだったらもう何もしない」

「……レディーにここまでしておいてそれは随分と都合がいいとは思わないかしら？」

「だよな」

ツバサとて、そのように都合のいい展開になるとは思っていないが、一応、苦しそうに腹部を押さえ、剣を強く握りなおした少女にもう一度だけ宥めるように声を掛けた。

「止めとけ。お前じゃ俺に勝てないだろ」

ツバサへのレイピアでの一突きも、エンオウの一撃を受けた動作も、神聖帝国騎士の動きで、それとしては少女の動きは完成されていた。一流といっていいだろう。だが、ここは戦場でも、駆け引きの無い騎士同士の決闘の場でもない。動きがあまりに完成され、理性的で合理的過ぎた。それだけでは、こういう場で幾度となく死線を潜り抜けたツバサに、少女は及ばないだろう。

「確かに、今のわたしじゃ勝てないわね」

ニヤリ、と少女が笑った。

「けど、ちょっとだけ本気を出せば……」

「ん？」

「負けないわ！」

言うと同時に少女は剣をツバサへ向けて投擲した。ツバサは余裕を持ってそれを迎撃した。

が、その次の瞬間には少女の端麗な顔がツバサの目の前に現れた。そして、ツバサはある事に気が付いた。少女の黄金眼が再び紅くなっていたのだ。

少女が無駄一つない、動作――先程までの理性的な意味ではなく、本能に従っているような――でツバサの顔面に殴りかかった。その拳は魔力の赤い光に包まれていた。

「くっ」

ツバサは辛うじてエンオウで拳を受け止めた。そして、彼女が何者であったか悟った。

「半魔族か！」

半魔族――魔族と人間の間の子。魔族と人間の間に子ができるのは非常に稀である。もともと、寿命が人間とは比べ物にならないほど長い魔族は人間に比べて大きく繁殖力で劣っている。それに加えて、人間と魔族の姿かたちは似ているが、別の種族である。互いに愛しあった魔族と人は歴史上多くいるが、子が残ったのはほんの僅かである。その数少ない子である半魔族は人間と魔族の血の両方が流れていて、上手くそれをコントロールできる。その気になれば、完全に人間のように、魔族のように振る舞える。だが、あくまで身体は魔族と人間との中間物であるが故に、人間よりも強大な力を持つ魔族の血を多く身体に流せば、身体や精神に負担が大きくかかる。そして、実際、目の前の少女も、魔族の血の負担によって理性的な面を半ば失っているようだった。

ツバサの問いに答えることなく、少女の身体が、獲物に飛び掛る獰猛な猟犬のごとく飛び掛る。余りに理性のない、単調な動き。ツバサはその単調すぎる動きに半ば呆れながら、エンオウを一閃させる。

しかし、獣は止まらなかった、高速で薙ぐ刃を少女は魔力でコーティングされた手で掴み、刃を軸に空中を一転し、そのまま踵（かかと）を振り下ろした。

「がッ」

ツバサは頭部に当たれば、頭蓋骨の中身を揺さぶられるだけはすまなかっただろう一撃を、僅かに逸らし、肩で受けた。ツバサを守っている魔力など、何ひとつ役立たず、粉砕された。だが、ツバサが肩の痛みを実感する前に、その神経が痛みを伝える速度よりも早く少女は次の行動を完遂していた。グサリ、と少女の腕が、ツバサの身体を貫いた。

「うっくぅ……、ぁぁっはっ」

ツバサが苦痛に呻く。今すぐ、叫び声を上げたいのに、身体に刺さっている少女の腕が、身体の中で詰め物のようにツバサが声を上げようとするのを妨害する。彼女の腕が刺さっている状態では、発声に使っている筋肉が上手く動かないのだ。

少女の紅い、冷たい瞳が、ツバサを捉えた。もはや、戦闘能力の半ばを失ったツバサに対して先ほどまでの敵意も殺意もなく、人間の血が勝っていたときに瞳に浮かんでいた、理性的な輝きもなく、ただ、そこには壮絶な苦痛を強いられているツバサが映っているだけだった。
そしてそのまま、ズボッと、少女の腕が引き抜かれた。

「がああああっぐうっうっうっあぁぁっはっ、はぁっはっ」

続いて、少女が床に落ちていた剣を見た。それはツバサがエンオウで弾き飛ばした彼女のレイピアだった。少女はそれを魔力で引き寄せ、手に取った。そして、それをツバサのクビへ勢いよく振り下ろそうとした、その時だった。

「やめてください、モニカ様！」

若く、人懐っこそうな女性の声が、響いた。

「あら、危ないところだったわ」

頭の後ろを掻(か)きながら、少女の瞳が紅から黄金へと移り行く。瞳が完全に黄金になると、先ほどの獣じみた雰囲気はなくなり、研ぎ澄まされた刃のような理性が身体全体から感じられた。しかし、ツバサの関心は少女ではなく、新たに場に現れた女性に向けられていた。

「め…イド？」

ツバサがおぼろげに目にしたのは、なんとも可愛らしい、誰からも好かれそうな顔立ちをした、メイド服を着込んだ女性だった。朦朧(もうろう)とした意識ではそれ以上、はっきりした感想を持つことはできなかった。

一方で、メイドの方はツバサのその台詞を聞いてなぜか顔を引きつらせていた。やはり、意識を朦朧(もうろう)とさせているツバサにはそこまで識別できなかったが。

「あらぁー今なんと仰いました？　殺しちゃいますわよ？」

「――っ」

メイドが突然、全力でツバサの頭をぶん殴った。

腕で身体を貫かれた、後、どうしようもない激痛に耐えているときに放たれた一撃に、ツバサが声にならない悲鳴をあげながら、地

面に倒れる。

「ちょっと死んだらどうするつもり？」

人間ひとりの命を話題にするには随分と軽い口調だった。多くのものが冗談でこの程度のノリで命を話題にすることはあったが、目の前で体を貫かれた人間が倒れているにも関らず、ここまで軽い口調で命という話題を扱った者はほとんどいないだろう。

「はっ！　わたしとしたことがついうっかり人間を殺してしまうところでした。てへっ」

てへへっ、と頭のゆるそうな締まらない顔でメイドがこつん、と自分の頭を叩いた。そんな些細な光景ももう、ツバサの目には映っていなかった。映っているのは高級そうな赤い絨毯が敷かれた床だけだ。赤い絨毯に紅い血が染み込んでいくのを、力なく眺めている。

死。その言葉がツバサの中でうっすらと連想された。もう、全てを諦め、死を受け入れようとした時、少女がツバサの顔を覗き込んだ。そして、死の一歩手前でツバサが命を繋いでいるのを確認すると微笑んで見せた。

「……うん、生きてるわね。まぁ、安心して眠りなさい。命は助けてあげるから」

まるで、子供がおもちゃを見つけたかのような笑いだった。ツバサは薄れていく意識の中で、娼婦のような笑いよりも、残虐なものを連想させる笑みよりも、こちらの少女の笑みの方がずっと可愛い、と思った。

幕間　運命の夜

幕間・運命の日

神聖帝国は西方諸国の最東に位置する強国である。その歴史は古く、建国以来、北方の魔王領や、東方のアガレス教諸国からイブレーア教の盾としていくつもの戦争を乗り越えてきた、諸島連合王国（アイランズ）や魔王領と肩を並べる三大国の一角である。

広大な国土の東部には商業都市などほとんどなく、豊富な地下資源の生産にいそしむ鉱山都市や東方防衛の為の軍事都市などがほとんどを占め、そのほかの地はやせ細く、耕作にも向いていない。それ故に人口の七割近くが帝都アステルブルクを中心とした西部で生活している。

人口百二十万人を数えるアステルブルクは内陸の都で、帝国最大の港市テリテアやフェン共和国へ直通の蒸気機関車が、二十年ほど前に開通した。ほかにも帝国各所へ繋がる主要線路が集合し、西方諸国の東部における最重要の交通網が集まっているといえる。比較的高地にあるアステルブルクの夜は例え夏であっても早く、深いのだが、近年、帝都圏に導入されたガス灯の光によって、深い闇夜の時でさえも人間の時間となったのだった。

ある冬の日の夜、帝都アステルブルクの交通の心臓とも云える、帝都中央という実にわかりやすい名前を持つ駅に一人の若者が降り立った。名前はツバサという。

「さむっ」

比較的温暖なラダナ帝国からやってきたツバサは汽車を降りた瞬間、思わずそう云ってしまった。既に冷え込んだ夜の冷気が、ツバサの息を白くさせている。その容貌は、見たものが思わずじっと見てしまうものだ。その理由は二つあり、まず、その容貌が間違いなく、美青年と称してよいものであること。第二に、多民族国家である神聖帝国であっても珍しい、短い黒髪と、翠の瞳だったことである。もし、ツバサの話す神聖語を聞けば、ラダナ帝国なまりがみてとれ、ツバサをラダナ帝国出身者だろ思うだろう。言葉のなまりの他にラダナ人は西方諸国の人間よりは黒髪や翠の瞳は珍しくないのだからなおさらだった。だが、その考えは半分だけ外れている。ツバサの両親の内、父はラダナの名門貴族だったが、母は西方諸国では蛮夷と見下される、大和帝国からの移民だった。ツバサの男だと柔らかな黒い髪は倭人の母ゆずりのものだった。

「冬の神聖帝国は始めてなのですかな？」

「ああ、他の季節には二，三度訪れたことがあるんだが。あんたは平気なのか？」

「まぁ、温暖なラダナとはまったく違うでしょうな。しかし、我らが諸島連合は北になると神聖帝国の比ではないくらい冷えますからな。あの魔王領もかくやというほどですよ」

ツバサと話をしているのは、スーツにシルクハットにステッキという、いかにも紳士という格好をした、少し太った中年の男だった。

「でも、寒いのは嫌いじゃないけどな。ラダナでは滅多に雪は降らないけど、西方諸国ではよく降るだろ？　羨ましい限りだ。幼い頃、雪遊びは年に一度か二度しかできない楽しみだったな」

「まぁ、子供の頃はそうでしたがね。この歳になると、汽車が走らなくなったり、電信が雪の重みで切れたり、商売の邪魔にしかならないのですけどね」

少し思い出に耽るツバサに苦笑しながら男はそう云った。ツバサはこの男と汽車で一緒になっただけなので詳しいことは知らないが、男は主に新大陸で採れる砂糖と綿を取引している貿易会社を営(いとな)んでいると聞いた。改札をくぐったところで、男と別れる。

「貴方に神の祝福あれ、とあなたがイブレーア教徒ならそう云うところなのですがね」

男の言葉にツバサは苦笑した。ツバサ自身はラダナ帝国の国教であるアガレス教の祝福を得ていない。ツバサが祝福を受けているのは遥か東の倭国の神である。が、どちらにしろ、ツバサはイブレーア教徒ではないので確かにイブレーアの神々の祝福を受けるのはおかしいだろう。

「貴方の旅に幸あれ、といっておきますよ」

ツバサの苦笑を見た男はにっこり笑いながら付け加えた。

「じゃあ、俺からは貴方の商談に幸あれ、と云っておくよ」

男はそれを聞いて愉快そうに笑い、ステッキを突きながら駅前にあるホテルへと歩いていった。

男とは、汽車の中で席が向いになっただけで、名も知らない。ツバサがただ、黙って外の景色を見ているときに突然、話しかけてきた

のだ。西方諸国では汽車で同席した人と会話するのが流儀だとは聞いていたが、見るからに異教の国の出身であるツバサに積極的に話しかけてきたのは、何度か汽車に乗ったことがあったのだが――彼が初めてだった。その事を男に告げると、男は人懐っこい笑みを浮かべて答えた。

「これからは科学の時代ですよ。異教徒だろうが魔族だろうがビジネスのパートナーに成り得るのですよ。もはや肌や瞳、髪の色で争う時代ではないでしょう」

そして、自信満々に断言した。

「さっきも言いましたが、これからは科学の時代です。魔術やら宗教やらに縛られて、それが理解できない輩は今後十年で物置のガラクタになるでしょう」

ふと、ツバサは辺りを見回した。駅前はガス灯が燐々と輝き、彼の背後からは鉄の巨大な車――汽車の汽笛と走行音が聞こえる。人々が身に纏っているのは機械によって織られた綿の服で、ホテルの横には公衆電報所があり、魔王領やラダナ帝国は別にしても、西方諸国中にメッセージを送れる。これからは科学の時代、という男の台詞に、ツバサは心の中で同意した。

そして、科学や技術の時代の足音は戦場に於いて特に顕著だった。遠距離攻撃の魔術は石弓や軽火器で代用され、城壁を打ち破るのに必要だった強力な魔術は大砲で代用されるようになった。それでも、魔術に対抗できるのは魔術だけ、という図式だけは残っている為に、騎士達は衰退しつつも現存していたにだった。
そして、ツバサはその衰退しつつある世界に生きる人間だった。

ツバサは、ただの人が見れば、異国出身の美青年となるだろうが、ツバサのとっている動きを正確に認めれば、ツバサの職業を絞ることができる。ツバサのすらりとした、少しだけ小柄な身体は、常に隙のない身のこなしで帝都アステルブルクを移動し、極力、瞳を動かさないように、辺りを確認している。そして、視覚だけではなく、常に雑踏の中の”敵意””殺意”を感じ取ろうと心を研ぎ澄ませている。ツバサの職業は、ラダナ帝国の軍人だった。それも、西方諸国では騎士と呼ばれる、魔術という、科学と相反する力を使う軍人だった。

ツバサが今回、アステルブルクに滞在する時間は、僅か一日にも満たない。今回のツバサの任務は地道な情報収集や工作ではなく、暗殺であるからだ。暗殺というものは、時間を掛けた緻密な計画を元にやるのだが、ツバサが行うのは実行のみで、計画等は別の機関（軍に命令できるような、そしてその機関がどこかはツバサには知らされていない）が立てている。ツバサは頭に叩き込んだ計画書通りに、まず、駅前に止まっている辻馬車に乗り込んだ。

辻馬車に揺られながら、ツバサはこれから行う仕事について思いをめぐらしていた。ツバサが今回の仕事に対して抱いた感情の全ては負の感情で、とりわけ嫌悪感がもっとも多い割合を占めた。

「なんだかな、気が進まないな」

「ん？　なんです？　お客さん」

微かに、ツバサの愚痴を聞き取ったらしい、御者が尋ねた。

「いや、なんでもない」

そう答えておきながら、一人愚痴ってしまうのも仕方ないではないか、とツバサは思った。なぜなら、今回のツバサの仕事は年端もいかないような少女を殺すことだったからだ。ツバサは、自身が善良な人間とは思っていない。だが、冷酷非道な人間とも思っていない。ツバサは自身を舞台裏で活躍する軍人である、という一点を除けばごく普通の人間であると思っている。今まで受け持った暗殺は厄介な敵国の要人たちだった。だが、この少女は資料を読む限りはただの貴族の娘だ。なぜ、彼女を殺さなければならないのか、納得がいかない。もしかしたら、彼女が死ななければならない理由がラダナ帝国にはあるのかもしれないが、少なくとも、ツバサにそれは知らされていない。

ツバサは今回の仕事を命令されたときからそのことを不審に思っていた。暗殺する理由さえ、知らされていないのは、この任務がはじめてだったからだ。だが、それでも。ツバサは歯車として仕事をこなすという選択肢がもっとも無難であることには変わらない。心は痛むが少女には死んでもらわなくてはならないのだった。

馬車で揺られること二時間、御者に金を支払い、帝立公園の辺りで降りた。ここからターゲットである少女の家へは、まだ、歩いて二時間ほどかかるが、これも足をなるべく残さないようにする為の行動である。もっとも、ラダナ軍部も、ツバサ自身も、異国の美青年の容姿であるツバサの痕跡を完全に消せるとは思っていない。やらないよりはマシ、というだけだ。

深夜になろうという時間になって、ようやくツバサはターゲットの屋敷へたどり着いた。屋敷は郊外の森の中にあり、辺り一面を切り開いて立てられている。景色を損なうのを、屋敷の主が嫌ったの

か、屋敷の周りに塀はない。この夜の月は満月で、月明かりで、はっきりと間取りも見て取れた。

科学の力によって夜さえも自分たちの時間へと組み込んだ人間たちだが、この時間に外を出歩いているものはほとんどいない。多くのものが自宅で休んでいるか、酒場などで一日のストレスを発散している。まして、都心から外れた郊外の屋敷となれば尚更人気はない。ターゲットである少女の家系は資料によれば二流で、それゆえ、実際にツバサの見たところ、警備もザルだった。襲われることはまずないが、家門の体裁として警備員を雇っている、という感じだ。

「”影”」

ツバサが呟いたのは、光を遮断する呪だった。つまりは、姿を消す呪いだ。もっとも、音は消せないし、気配も消せない。それに、ある程度魔力を持つものには歪みが見えてしまう。だが、警備の者は騎士ではなく、ただの近衛兵のようなので、問題はないだろうとツバサは考えた。

ツバサは、音を立てないように、玄関の扉の方へと歩いた。警備の男は、目の前にツバサがいるにもかかわらず、退屈そうにあくびをかみ締めている。その男を平然と横切り、しばし、玄関の扉の前に立つ。ここの正面玄関の警備が、あと十分ほどで交代することは、命令書にも記されている。

しかし、それから十分たっても特に動きはなかった。警備の男は軽くいらだっているようだった。小声で、誰かの名前と罵声を口にした。

ツバサは多少の誤差を考えて、早めに行動したのだ。だが、ツバ

サ自身、遅くなることはあっても、早くなることはないだろうとは思っていた。自分だって寝ずの番などという仕事は少しでも遅刻していきたいとツバサは思った。

そのとき、扉が開いた。出てきた男と、今まで警備をしていた男とが、すぐさま軽い言い合い――ふざけあっているようなささいなものだが――をはじめた。

（いける！）

ツバサは、自然に閉まっていく扉の隙間にサッと身体を滑り込ませ、屋敷への侵入を達成した。

玄関に入って直ぐにある単調な飾り気の無い廊下を歩く。ツバサの頭の中には外から確認した少女の部屋の場所が正確に記憶されていた。後五歩で、少女の部屋のはずだ。４、３、２、１、と頭の中でほとんど正確にツバサは距離を測る。歩みを止めると、ツバサの目の前には扉があった。鍵穴はついているが、無用心にもかかっていない。否、そもそも屋敷自体に警備がいるのに部屋に鍵を掛けるのはよほど警戒心の強い人間だけだろう。ツバサは扉を静かに開き、そっと身体を忍ばせた。

そこで見た光景に、ツバサは言葉を失った。

そこには、絵画で見たときよりも、ずっと美しい少女が居た。

幕間　運命の夜（後書き）

この話は第一巻ともいえる話は完結まで執筆済みでして、今後毎週木曜日の１９時に更新していくつもりです。

感想等お待ちしております。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8289w/

魔姫のツバサ

2011年10月13日04時55分発行